子供の問題意識を大切にした道徳科授業の取組と課題

― 事前読みによる学習のめあてづくりを通して ―

香川大学　清水 顕人

香川大学　植田 和也

キーワード：問題意識、事前読み、学習のめあてづくり

はじめに

本稿は、令和 4 年 8 月 28 日実施の日本道徳教育方法学会第 4 回オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践 Part2」として提案発表した内容と、その後の討議において議論した点や助言等を踏まえてまとめたものである。ただし、本稿のテーマは、学会 DVD の授業実践でも紹介した子供の問題意識を大切にした道徳科授業の取組であるので、全ての質疑や意見を取り上げることができなかったことをご理解いただきたい。なお、セミナーでは植田、清水、西吉が発表したが、紹介した授業は、当時、K 大学附属小学校の西吉亮二教諭と山本健太教諭（当時）が実践した授業である。

1. 問題意識の重要性

道徳科の授業において、児童生徒の問題意識を大切にすることの重要性については、周知のことかと思われるが、基本的なことも含めて確認しておきたい。

まず、問題意識を大切にすること自体は、子供が自ら考え学ぶ基盤ともなり、主体的な学習においても重要な視点である。また、他人事ではなく、問われていることや考えていこうとすることに関して、自己を見つめる機会ともなり問題を自分事として捉える上でも肝要である。さらに、問題意識をもつことで、道徳的な問題について主体的に学ぼうとする力にもなり得るであろう。ただ、これらの点については、道徳科だけでなく他の授業においても同様のことがいえるであろう。

中教審答申（2016）[1] においても、「発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考え、議論する道徳』へと転換を図る」と明示された。道徳科の授業において、子供たちの道徳性を養っていくためには、道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められることが肝要である。そして、その道徳的価値に根差した問題について話し合い、他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中での自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにしていくことが求められている。それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにすることが大切である。

（1）解説道徳編における基本的な確認

道徳科だけでなく、どの教科等においても、児童生徒の主体的な学びは個々が問題意識をもつことから、その一歩が始まると言っても過言ではない。ここでは、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編 [2]（以下、小解説と略記）における、問題意識に関する記述の一部を確認しておきたい。

まず、小解説第 4 章第 2 節道徳科の指導 2(1)イ道徳科の学習指導案においては、学習指導過

程を構想する際には、児童がどのような問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を理解し、自己を見つめ、多様な感じ方や考え方によって学び合うことができるのかを具体的に予想しながら、それらが効果的になされるための授業全体の展開を構想することが求められている。中学校の解説においても、生徒がどのような問題意識をもって学習に臨んでいるのかを具体的に予想することが重要とされており、学習指導案作成における児童生徒の問題意識の重要性が示されていると考えられる。

続けて、小解説第 4 章第 2 節 2(2)道徳科の特質を生かした学習指導においては、導入では本時の主題に関わる問題意識をもたせる工夫の大切さが、展開においてもどのような問題意識をもち、どのようなことを中心にして自分との関わりで考えを深めていくのかについて主題が明瞭となった学習への工夫が求められている。導入や展開場面における問題意識については、中学校の解説においても同様の記述が見られる。

また、小解説第 4 章第 2 節 3(4)道徳科に生かす指導方法の工夫においては、児童が問題意識をもち、主体的に考え、話し合うことができるように指導方法を工夫することが求められている。特に、イ発問の工夫では、「発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される」と記されている。中学校の解説においても同様である。

さらに、小解説第 4 章第 4 節 1(1)教材の開発と活用の創意工夫においては、道徳科に生かす多様な教材の開発について「児童が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用が求められる」と示されており、中学校の解説においても同様の記述が見られる。授業の構想に加え、教材の開発の段階で子供たちが問題意識をもてるようにすることが重要だといえる。

以上のことから、基本的に道徳科のねらいを達成するには、児童生徒の感性や知的な興味などに訴え、一人一人が問題意識をもち、道徳的な問題を主体的に考え、話し合うことが重要であることが解説道徳編に示されているといえる。

（2）授業における問題意識について

道徳科の授業における子供たちの問題意識の重要性について、浅見は著書[3)]の中で、道徳科の授業の充実を図る 4 つのポイントの一つとして「問題意識をもって授業に臨めるようにする」ことを挙げている。そして、道徳科で扱う問題として、「身近で切実な問題」「社会的な問題や現代的な課題」「教材の中に描かれている問題」の 3 つのタイプを示している。こうした問題意識をもつことを重視した授業の積み重ねによって「道徳科で養った道徳性がその問題の解決のみにとどまらず、様々な場面においてよりよい行為が実践できることにつながっていく」としている。

また、永田は講演資料[4)]の中で「子どもの問題意識を授業づくりの核とする」と表現し、学習指導過程を構想する際に重要とされる子供の問題意識に関して「教師の教える順番で作る授業から、子供の問題意識が起点となり、子供が追求しようとする順番で作る授業へと授業の構想の在り方を変えていくべき」としている。特に導入場面においては、問題意識をもって主題に臨むことが重要であり、「問題意識こそが主体的な追求を生み出す。問題意識のない『自分事』は考えにくい」とも示している。

さらに、島は著書[5)]の中で、「子どもたちがどんどん活躍する授業には、質の高い『問い』が必要」と表現し、教師の発問によって、子供たちの中に必然性のある問いが生まれることの重要性を示している。また、教師の発問が「子どもたちの中から出れば、もっと素晴らしい」とも示している。このことから、子供たちが主体的に思考を深めていく道徳科の授業を実現するためには、「なぜ」「どうして」といった子供たちの問題意識が重要であると捉えられる。このような「問い」の重要性は、田沼も著書[6)]の中で示しているところであり、「子供の数だけ個別的な『問い』が存在する」と述べている。

以上のことから、道徳科においては、子供たちが問題意識をもてるようにするとともに、それを起点として授業を構想し、子供たちが主体的に追求したり、必然性のある問いを生み出したりしていけるような授業が求められているといえる。

(3) 導入場面における問題意識を大切にした多様な取組

子供たちの問題意識を起点とした授業を展開するためには、導入場面が重要となる。導入の段階においては、本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入や、教材の内容に興味や関心をもたせる導入が考えられる。筆者らが様々な学校で参観してきた道徳科の授業においても、児童生徒の問題意識をいかすために、事前の様々な意識調査を活用する多様な場面を見ることができた。導入では意識調査を本時のめあてや問題意識につなげることで効果的に生かしている実践も見られた。また、事前調査結果を電子黒板で提示するだけでなく、その場で示された質問に個々のタブレットで入力して即時に視覚化される場面も見ることがあった。その場で提示された情報から何に注目するのか、児童生徒がどのような反応で受け止めているのかを瞬時に把握しながら、問題意識を高める工夫につなげることもよく見かけた。写真や動画を活用して生活場面における自らの経験と教材をつなぐことで問題意識を各自にもたせる工夫などは、小・中学校ともによく見られる取組ではないだろうか。

以下に、取組の具体をいくつか紹介したい。

① 事前アンケートを生かした取組

子供たちが現在もっている価値観を明らかにすることで、自分と他者の価値観の異同や、自分と教材の主人公の感じ方や考え方の違いに気付き、問題意識をもつことができると考えられる。

例えば、教材「泣いた赤おに」を用いた小学校低学年の実践（内容項目：友情、信頼）[7] において、教師は「友達アンケート」を事前に実施し、学級の子供たちが友達をどのように捉えているのかを明らかにした。子供たちからは「困っていたら助けてくれる」「一緒に喜んでくれる人」など、授業前の友達に関する多様な価値観が表出された。それらと主人公の赤おにや青おにの行動を比較しながら、主人公の赤おにの気持ちがどのように変化したのかを考えていくことを学習のめあてとしたのである。

別の例では、教材「へらぶなつり」を用いた小学校中学年の実践（内容項目：相互理解、寛容）[8] において、教師は事前のアンケートから学級の全員が「他者を許すことは大切だ」と考えていることを板書に掲示して明らかにした。一方で、それでも許すことができない時があることを、子供たちが自分の具体的な経験をもとに語っていく「あるあるトーク」の時間を設定した。子供たちが語る許せなかった経験談に対して、周囲の子供たちの中からは「あー、あるある」と共感する声が聞かれた。そうすることで、アンケート結果に示された、大切だと思う意識と、実際の行動とのずれを明らかにし、友達の失敗を許すにはどうすればよいのかという学習のめあてを共有したのである。

このようなアンケートは、ICT 機器を用いることで、実施、集計、結果の表示・共有までが容易になる。問題意識をもたせるためのアンケートの実施において、ICT 機器の活用は大変有効であるといえる。

② 写真や動画を活用して生活場面からの気付きを生かす取組

主題につながる場面は、子供たちの身の回りに存在している。しかし、子供たちはそれに気付いていない場合が多い。そこで、生活場面の写真などを用いて、子供たちが問題意識をもてるようにするのである。

例えば、教材「黄色いベンチ」を用いた小学校低学年の実践（内容項目：規則の尊重）[7] において、教師は校内の公共物の使い方が守られている場合とそうでない場合の例（フラフープ

の片付けの状況）を写真で示して比較できるようにした（**写真-1**）。そうすることで、「整理されている方が気持ちいい」「きれいに使えるようになりたい」などの思いが子供たちから表出され、みんなの物を使うにはどんな心が大切だろう、という学習のめあてを共有したのである。

生活場面などの写真や動画を示す場合においても、ICT 機器を用いることは有効であろう。小学校低学年においても、生活科の授業などでは、子供たち自身がタブレットを持って学校内の写真を撮ることが行われている。子供たち自身が生活の中から問題場面を見出し、共有することも可能であろう。

写真-1　日常の使い方を写真で提示

2. 実践事例より

ここでは日本道徳教育方法学会第 4 回オンラインセミナーでも紹介した、2 つの実践事例を取り上げる。両授業とも、事前読みを通して子供たちの問題意識を高めさせ、導入場面において、子供と共に学習のめあてをつくることを大切にしている。学習のめあてをつくるにあたり、子供は家庭において教材を事前に読み、その上で自分が疑問に感じる点や友達と考えてみたいこと、印象に残っている点等をノートに書き、教師に提出する。教師はそれらをもとに、子供たちの問題意識をホワイトボードに整理しておき、授業の導入場面で表出できるようするのである。このような子供の問題意識を大切にした学習のめあてづくりの実践事例から、授業者の工夫や今後への課題を整理したい。

（1）山本実践より

第６学年　　授業者：山本　健太（実践時：K 大学附属小学校教諭）
主題：「自分の心に誠実に」　【正直、誠実】
【教材】のりづけされた詩（出典　学研　みんなの道徳６年）
ねらい：誠実に行動しようとする際に必要な気持ちについて対話することを通して、自分自身に正直、誠実に生きようとすることが他者の信頼や自己の向上につながることを理解し、その理解を基に、自分の生き方について考え、これから正直、誠実に行動しようとする態度を養う。

本実践における学習のめあてづくりに関わる工夫は、導入場面に位置付けた「私の問いタイム」である。これは、子供の事前読みによる問題意識を大切にしながら、本時の学習のめあてを形成していこうとする時間である。

教師は、事前読みで生まれた子供たちの問いをあらかじめ把握し、同じような内容をまとめながら、本時までにホワイトボードに整理し、教室前面の右側に配置しておいた（**図-1**）。

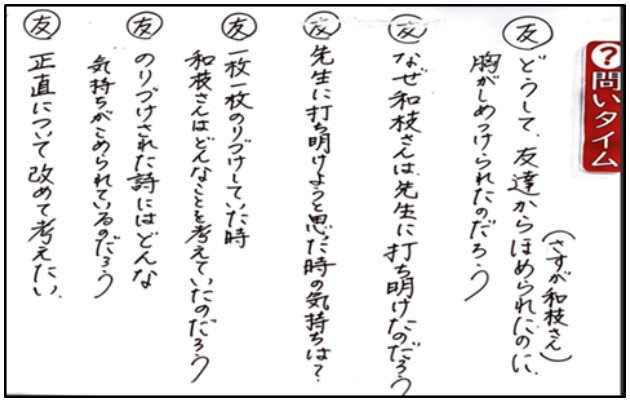

図-1　問いタイム：事前読みによる子供の問題意識

本時の導入場面の「私の問いタイ

ム」において、教師は、主人公が他人の詩をだまって使ってしまったことと、正直に打ち明けたことの両方を確認した後、「みんな、和枝さん（主人公）ってどんな人だと思う」と問いかけた。子供たちからは「自分に正直な人」「正直に言えた人」といった発言があった。その後、教師が子供たちに「問い」の発表を促し、「誠実な人になるにはどうすればよいのだろう」を取り上げ、主人公の正直な姿とつなげながら「誠実」と板書した（**図-2**）。

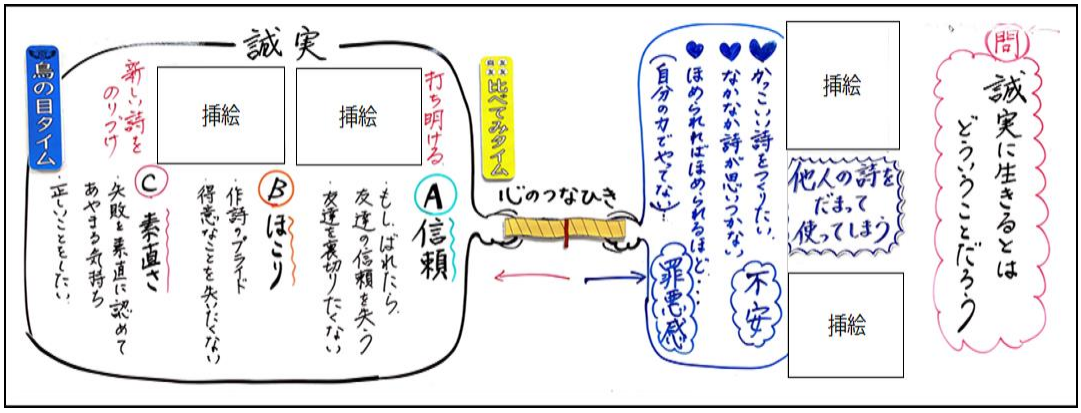

図-2　本時の板書の一部

さらに、教師は事前のアンケート結果（**図-3**）を示しながら、教材の主人公と子供の経験をつないだ後、「今日はどんなことを考えていったらいいかな。めあての言葉にすると、どうなるかな」と子供たちに問いかけ、子供の発言をもとに「誠実に生きるとはどういうことだろう」という学習のめあてをつくり、共有した。

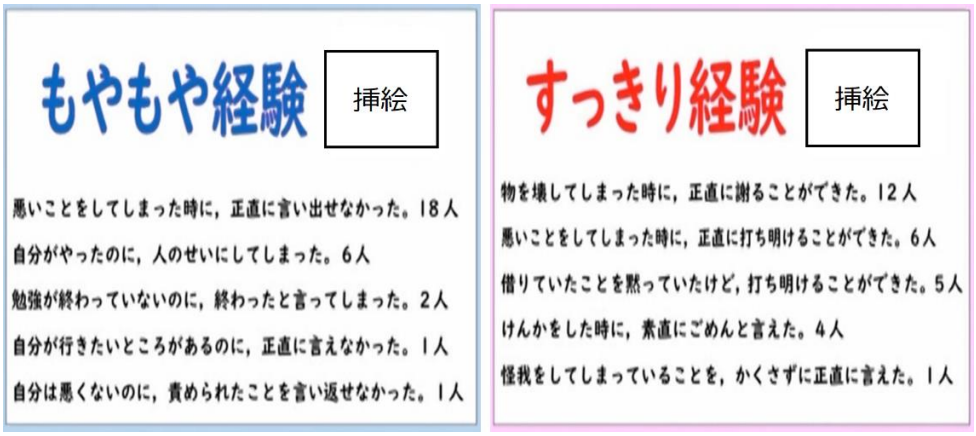

図-3　事前のアンケート結果

展開場面では、教師の「問い返し」等によって、より深い考えを促し、多面的・多角的な視点に気付かせようとした。子供たちから出された「A：信頼」「B：ほこり」「C：素直さ」を、学習のめあてを考え深めていく視点として導き出した。

終末場面においては、振り返りの時間である「鳥の目タイム」を設定し、子供が本時の学習をもとに、自分自身の考えや1時間での変容等を振り返ることができるようにした。

（2）西吉実践より

第５学年　　授業者：西吉　亮二（当時　K 大学附属小学校教諭）
主題：「より高い目標に向かって」　【希望と勇気、努力と強い意志】
【教材】世界に羽ばたく航平ノート（出典　学研　みんなの道徳５年）
ねらい：自己の向上のためにより高い目標を設定し、その達成には何が必要かを考え、自己評価しながら、困難や失敗にくじけずに努力しようという心情を育てる。

本実践における学習のめあてづくりに関わる工夫は、教室の前方に配置したホワイトボード「心のはてな」を用いて、子供たちと本時の学習のめあてを共有する時間を設定していることである。

先の山本実践と同様に、教師は、事前読みで生まれた子供たちの問いをあらかじめ把握し、同じような内容をまとめながら、本時までにホワイトボード「心のはてな」に整理し、教室前面の右側に配置しておいた（図-4）。

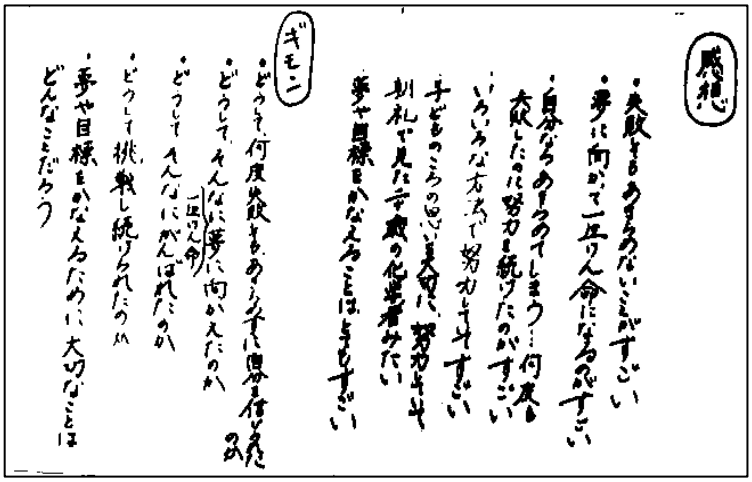

図-4　心のはてな：事前読みによる子供の問題意識

導入場面では、子供が感想について詳しく発表したり、示された疑問をもとに本時の学習のめあてを考えたりしていくのである。

ある子供の「一番左の疑問で、夢や目標をかなえるために、大切なことはどんなことだろうだったら、全部（の疑問）につながると思います。」という発言から、教師は、この疑問を本時の学習のめあてとすることを確認し、学級全体で共有した。

その後の展開場面では、子供から出された「A：強い心」「B：支えてくれる人」「C：好き」「D：努力」を、学習のめあてを考え深めていく視点として導き出した（図-5）。夢や目標をかなえるために大切なことは様々にあり、多面的・多角的な考えに触れることとなった。

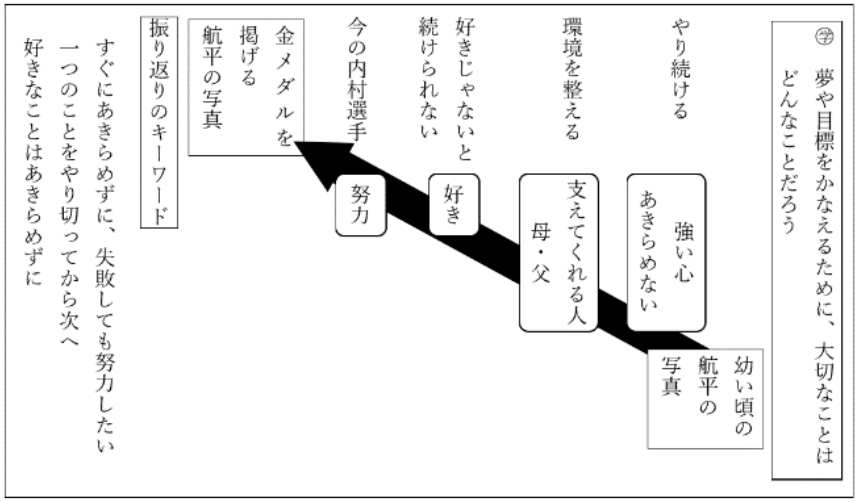

図-5　本時の板書の一部

終末場面においては、子供は４つの視点の中で特に大切にしたいことを意識しながら、１時間の振り返りとその理由を交流し、感想を返し合った。

(3) オンラインセミナーでの討議により明らかになった課題

オンラインセミナーの討議で出された質問や意見を以下に整理するとともに、課題として 3 点をあげる。

① 事前読みの在り方について

事前読みを行ったために、教材に初めて出合ったときの感動が薄れてしまう場合もある。また、道徳科で扱う問題には「身近で切実な問題」「社会的な問題や現代的な課題」「教材の中に描かれている問題」の 3 つのタイプがあり、題材によっては、事前読みを行うことが難しい場合もある。事前読みの在り方についてどのように考えればよいのか検討を深めていきたい。

② 「問い」をつくる目的について

道徳科の時間に扱う道徳的問題は様々である。2 つの実践事例は、いずれも事前読みを行い、子供たちに「問い」をもたせ、それらを基に学習のめあてを子供たちと共につくる流れであった。この流れは、子供たちが形式的に「問い」をつくること、つまり、「問い」をつくること自体が目的化する恐れはないだろうか。

また、子供たちの個々の「問い」は、常に教師が意図した道徳科の主題につながる「問い」となるのか。教師の意図とは違った方向に、学習のめあてが向かうことはないだろうか、この点についても十分に考慮する必要がある。

③ 「問い」をつくる時間の確保について

導入場面で子供たちから「問い」が表出され、それらをすり合わせて学習のめあてをつくるためには、ある程度の時間がかかると思われる。小学校であれば限られた 45 分という授業時間であるため、時間内で授業実践するために、何か工夫していることを明確にできないだろうか。そのことで、時間がかかるのではないかといった心配に対して方向性を示せるのではないかと考える。

3. 今後への課題

オンラインセミナーにおける討議の内容と、討議後に七條が示したまとめ[9] をもとに、今後への課題について述べる。

(1) 事前読みを取り入れることの意義と留意点

先に示した 2 つの実践事例においては、あえて「事前読み」を取り入れ、子供たちが教材を読んで感じたことや疑問（問い）を、教師が事前に把握・整理して授業を構想した。このことは、七條が「『事前読み』を取り入れることで、子どもが教材（内容や価値）としっかり向き合い、そこから引き出された課題意識を大切にした主体的な学びにつながる授業づくりを提案されていた」と述べているように、導入場面における子供たちの問題意識を起点とした学習のめあてづくりに役立つといえるだろう。

また、教師が子供たちの考えを事前に把握できることから、子供たちの意識に沿った発問を構成する上でも有効であったといえるだろう。展開場面では、教師の発問や問い返しによって、主題につながる視点が表出されたからである。

一方で、全ての道徳科の授業において「事前読み」を行うことが適切かどうかについては、検討する必要がある。七條が「『事前読み』については、例えば感動教材の場合など事前読みをすると感動が薄れてしまうという理由で、否定的な意見もあります」と示しているように、教材によって事前読みが適しているかどうかを、道徳科の目標に照らして吟味しなければならない。また、討議の中で出された意見にあるように、道徳科で扱う問題のタイプによっても、事前読みが適しているかどうかを吟味する必要がある。事前読みはあくまで方法であって、それ自体が目的とならないように留意しなければならない。

（2）個の「問い」から、共に学び合う「問い」の共有化へ

道徳科の授業が、子供を主人公とした主体的な学びとなるためには、子供たち一人一人の「問い」が重要である。しかし、子供たちの「問い」が、初めから必然性のある「問うべき問い」として表出されるとは限らない。問いの深まりについて、七條は「個の『問い』は学び合うことを通して深められます。つまり、『問い』は、個の『問い』から共に学び合う『問い』へと共有化されることによって、はじめて意味をもつと思います」と述べている。2 つの実践事例では、事前読みの際に子供たちの中にでてきた個の「問い」を、ホワイトボードや発表を通して共有し、さらに共に学び合う「問い」として学習のめあてをつくっていった。この過程を大切にすることで、道徳科における「協働的な学び」が実現すると考えられる。

一方で、先の事前読みと同様、「問い」をつくること（問いの形で表現すること）自体が目的となっては本末転倒である。問いの共有化によって個の問いは深まっていく。子供たちが道徳的問題に気付いて問うべき問いを見出し、主体的に追求していくことが重要である。その起点としての「問い」であることを忘れてはならない。

また、七條が「児童の『問い』と教師の『ねらい』とをどうすり合わせ、学習のめあてをつくっていくかについては、本実践も踏まえ、今後さらに研究を深めていく必要があります」と指摘しているように、子供たちの個々の「問い」が、常に教師の意図した道徳科の主題につながる「問い」になるとは限らない。2 つの実践事例では、教師が意図をもって子供たちの反応を整理し、ホワイトボードに示す順序や発表の取り上げ方などにも留意しながら、学習のめあてをつくっていった。子供たちの「問い」は、最初は道徳的な問題とは離れたものであるかもしれない。しかし、教師が学習者の視点に立ち、個々の子供たちの考えたい「問い」を受け止め、意図をもって組織化・共有化していく過程を通して、個の「問い」はより深く広い「問い」になると考えられる。

さらに、討議では、「問い」をつくる時間の確保の問題について指摘があった。2 つの実践事例では、事前読みを行ってはいるが、本時の中で教師が教材文を範読している。そのため、従来の授業に「問い」をつくる時間が付加された構成となっており、45 分間の授業時間に収まるのかという指摘であった。確かに、最初は時間がかかるが、子供たちが事前読みを経て互いの「問い」を共有し、学習のめあてをつくって追求していくという「学び方」を学ぶことで、かかる時間は徐々に短縮していった。もちろん、形式的な学びに陥ることのないように留意することは必要である。

本稿において示した取組が、子供たち自身が有益だと実感できるような「学び方」の一つとなることが重要であると考える。これから子供たちが歩んでいく人生において、自ら「問い」をたて、問うべき「問い」を他者と共有し、共に追求していく協働的な学びを実現することが求められている。

注

1）中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
2）文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編」
3）浅見哲也（2021）「道徳科 授業構想グランドデザイン」（明治図書出版、129-134 頁）
4）永田繁雄（2021）「新しい道徳教育の在り方を求めて ― 次世代に向けて、子供の豊かな生き方を拓くために ―」（日本道徳教育学会 第 97 回大会 講演資料）
5）島恒生（2020）「小学校・中学校　納得と発見のある道徳科『深い学び』をつくる内容項目のポイント」（日本文教出版、20 頁）

6）田沼茂紀（2020）「問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり　学びのストーリーで『自分ごと』の道徳学びを生み出す」（東洋館出版社、34-36 頁）
7）山路晃代、好井佑馬 他（2021）「さあ始めよう 道徳科授業づくり入門」（七條正典・植田和也 監修、清水顕人 他編著、美巧社、58-69 頁）
8）高橋史弥 他（2022）「道徳科を要とした道徳教育の推進 ～校内研修の充実を求めて～」（七條正典 監修、植田和也 他編著、美巧社、78-81 頁）
9）七條正典（2022）「日本道徳教育方法学会 第４回オンラインセミナー報告 私の授業づくりと授業実践 Part2 ― 学会 DVD の授業実践の紹介 ― まとめ」

謝辞

本稿をまとめるに当たり、西吉亮二氏と山本健太氏に協力をいただいたことを、ここに御礼申し上げます。